

コリント人への手紙第一16章 「すべての人の神の教会」

1A コリントへの旅 1-18

1B エルサレムへの献金 1-4

2B コリントでの滞在 5-9

3B テモテの派遣 10-12

4B 強さと愛 13-14

5B コリント出身の働き人 15-18

2A 挨拶 19-24

1B アジアの諸教会 19-20

2B パウロ自身の手記 21-24

本文

コリント人への手紙第一 16 章を開いてください。ついに、最後の章です。パウロは、これまで、コリントの教会にある問題を一つ一つ、取り扱っていきました。しかし最後は、そこに焦点を当てず、彼らの教会が他の諸教会とつながりがあることを、具体的な事柄で示していきます。手紙の冒頭で、パウロはこう述べていました。「1:2 コリントにある神の教会へ。すなわち、いたるところで私たちの主イエス・キリストの名を呼び求めているすべての人とともに、キリスト・イエスにあって聖なる者とされ、聖徒として召された方々へ。主はそのすべての人の主であり、私たちの主です。」パウロは、意識して、意図的に、コリントにある教会は、神の教会の一部であり、他の地域の諸教会の兄弟たちとつながりがあることを述べています。

それは、その肉적인考え方により、自分の教会のことだけを考えていたからです。自分のことの話が中心であり、自分たちの教会の話だけになり、他の教会に目が向かなくなります。派閥の問題がありましたが、それは、神の福音にある広がりにも目が留まっていなかったからです。また、女たちが被り物を取って礼拝に集っていましたが、「11:16 **そのような習慣は私たちにはなく、神の諸教会にもありません。**」と書いていました。神の教会であり、他のいたるところで主の御名を呼び求めている教会とつながっている、一つになっていることが見えていませんでした。キリスト者は、肉的になると自分が中心になりますが、霊的になると、神とキリストを中心に考え、ゆえに、世界に広がりを持つ教会の兄弟姉妹にも思いは行くのです。

1A コリントへの旅 1-18

初めに、エペソにいるパウロが、コリントのほうに向かう計画について話していきます。その時に、彼が他の地域の教会に対しても行っていたことを、コリントの人々にも伝えます。それは、聖徒たちの献金のことです。エルサレムにいる聖徒たちへの献金であり、貧しい彼らのために、異邦人が

主体の教会に、献金を募っていました。

1B エルサレムへの献金 1-4

¹ さて、聖徒たちのための献金については、ガラテヤの諸教会に命じたとおりに、あなたがたも行いなさい。

エルサレムの教会は、経済的に困窮していました。以前も、パウロとバルナバがアンティオキアにいた時に、大飢饉が起こって、それで、「使徒 11:29 弟子たちは、それぞれの力に応じて、ユダヤに住んでいる兄弟たちに救援の物を送ることに決めた。」とあります。なぜ貧しいのか、二つのことが考えられますが、一つは、エルサレムの教会は、人々がすべての財産を売り払って、それを使徒たちのところに集め、配給制で暮らしていたことが、使徒の働きで分かります。それぞれが仕事をして、自分の生活を賄っていたのではなく、共産制を取っていたのです。それで、教会の財政が破綻してしまったのかもしれませんが、そして、迫害です。不信者のユダヤ人からの迫害は、どこにおいても酷いものでしたが、エルサレムに住んでいる者たちのほとんど全員がユダヤ人です。そこで、キリストを告白して生きるのは、多くの経済的な犠牲もあったことでしょう。キリストのからだの一部が苦しめば、他の部分も苦しみます。他人事になることはできないのです。それで、足りない部分を補うために、余計に与えられている他の部分が分かち合っていくのです。

それだけではありません。パウロがローマ人への手紙を書いている時でも、他の手紙でも、そこで見えてくる、彼の切なる思いがありました。それは、「キリストにあって、ユダヤ人と異邦人が一つになっている。」ということです。キリストを信じることによって、罪から救われ、神の怒りから救われるということは、大きな情熱でありましたが、それだけでなく、教会にある一致、キリストのからだとして一つになっていることを求めています。けれども、ユダヤ人と異邦人の間の壁は、とてつもなく大きいものです。ペテロが、アンティオキアの教会にいた時に、パウロもバルナバもペテロも、異邦人の兄弟たちと食事を取っていましたが、エルサレムの教会から人々が来ると、割礼派の人たちを恐れて、その席から離れて行ったのです。それでパウロが、人々の前で、ペテロのしたことを責めなければいけませんでした。(ガラテヤ 2:11-14) 神の恵みの福音を知って、コルネリウス一家の回心を見たペテロでさえが、ユダヤ人と異邦人の壁をまだ心に持っていました。エルサレムにいるユダヤ人が、律法を守っている人々ばかりなので、どうしても、異邦人の信者を受け入れられなかったのです。

しかし、キリストが私たちの平和であり、両者の壁を取り除かれたのです(エペソ 2:14-16)。それを、概念や頭の中のことではなく、本当にその通りなのだということを示すために、異邦人の教会の兄弟たちが、貧しいエルサレムの兄弟たちのために献金を集め、彼らとキリストにあって一つなのだということを示そうとしていました。

またパウロは、「ガラテヤの諸教会に命じたとおりに」と言っていますね。ガラテヤは、アジアのほうの教会です。今のトルコ、エペソやコロサイなどのアジアよりは東、アンティオキアよりは西にある地方です。今の、カッパドキア辺りの地域一帯です。その教会で、聖徒たちのための献金をしなさいと命じていました。ユダヤ人と異邦人にある一致だけではなく、コリントにとっては、はるか遠くにある地域の教会の人びととも一つなのだという事です。

² 私がそちらに行ってから献金を集めることがないように、あなたがたはそれぞれ、いつも週の初めの日に、収入に応じて、いくらかでも手もとに蓄えておきなさい。

パウロが、献金の集め方について指示を与えています。献金についての大切な原則的なことを見ることができます。献金というのは、自分が心で定めて行うものです。与えられた収入があります。そして、主に対して献げる時に、だれからも強いられてでもなく、また人に見せるためでもなく、祈りの中で定めます。それを献げるのです。ですから、その場で献金を集めれば、何らかの別の動機が働いてしまいます。それを避けるために、前もって集めておくのです。

そして、「週の初めの日に」と言っていますね。教会が、週の初めの日、つまり日曜日に集まっていくようになったことを表している言葉です。使徒 20 章 7 節で、トロアスにある教会でも、週の初めの日に、パンを裂くために集まっている様子が描かれています。主が週の初めの日によみがえられたこと。また、五旬節が満ちたのは、週の初めの日であり、その時に聖霊が降り、教会が誕生しました。ユダヤ人たちは、第七日目安息日であり、これを聖なる日とするので、土曜日なのですが、キリスト者たちが日曜日に礼拝を献げるようになったのは、こうした経緯があるからです。けれども、ローマ 14 章には、主の日をある特定の日としている人もいるし、毎日が主の日であるという人たちもいるということをパウロが言っています。ですから、別の曜日に礼拝を献げることがあってよいと私は思っています。大事なものは、自分で心に定めて主を礼拝することです。

³ 私がそちらに着いたら、あなたがたの承認を得た人たちに手紙を持たせてエルサレムに派遣し、あなたがたの贈り物を届けさせましょう。⁴ もし私も行くほうがよければ、その人たちは私と一緒に行くことになるでしょう。

エルサレムの教会の兄弟たちに、パウロだけが行って、集めた献金を渡しても意味がありません。異邦人の教会の人たちがそこに行くことに意味があります。それで、パウロは、コリントの教会の人たちが承認する人々が手紙をもっていくという形で、正式なものであることを示すことができます。こうやって、ユダヤ人のキリスト者と異邦人のキリスト者の交わりができるようになります。

2B コリントでの滞在 5-9

⁵ 私はマケドニアを通過して、あなたがたのところへ行きます。マケドニアはただ通過し、⁶ おそらく、あ

あなたがたのところに滞在するでしょう。冬を越すことになるかもしれません。どこに向かうにしても、あなたがたに送り出してもらおうためです。

パウロの宣教旅行の地図をごらんになると良いと思います。彼は今、エペソにいますが、そこはローマのアジア属州にある、エーゲ海の巨大な港町です。その北に行けば、かつて彼がヨーロッパへ旅立った、トロアスがあります。覚えていますか、夜の夢の中で、マケドニア人が、助けてくださいと言って、それで彼は、これが主の導きであることを確信して旅だったところです。今のギリシヤは、アテネを含めて南がアカイアというところ。コリントもそこにあります。その北にマケドニアがあります。パウロがトロアスから船に乗って、降り立ったのがネアポリスというところで、そこからピリピはとても近いところにあります。ピリピ、そしてテサロニケ、そしてベレアへと足を運びましたね。その地域がマケドニアです。

「マケドニアはただ通過し」と言っていますが、もちろん、そこにはパウロが建て上げた諸教会があります。ですから、彼らには挨拶しながら、励ましを与えながら動いていくのだと思います。そして、彼らに対しても、エルサレムの貧しい兄弟たちのための献金を募るつもりです。コリント第二 8 章には、マケドニアの諸教会に恵みが満ちあふれていて、彼ら自身も極度の貧しさの中なのに、なんと、それでも自ら進んで、力以上に献げたとあります。エペソからアカイアに行く船はいくらでも出ていたけれども、それでもマケドニアを通過するのは、そういった意味があるからです。

そして、以前、コリントの教会に長期間滞在したように、彼らのところに滞在して、教えていきたいと願っていました。「冬を越すことになるかもしれません。」と言っていますが、これは、彼がコリントからエルサレムに向かって船出しようと思っているからであり、冬は海が荒れるため、一切、航行できないからです。

ちなみに、使徒の働きを見ると、彼は確かにマケドニア地方を通っています。「使 20:2-3 そして、その地方を通り、多くのことばをもって弟子たちを励まし、ギリシヤに来て、3 そこで三か月を過ごした。そして、シリアに向けて船出しようとしていたときに、パウロに対するユダヤ人の陰謀があったため、彼はマケドニアを通過して帰ることにした。」確かに、コリントで三か月を過ごしました。そして、春になったので、シリアに向けて船出しようと思ったのですが、ここが彼の計画変更を迫られた部分です、ユダヤ人の陰謀がありました。船の上から彼を突き落とすとかしようと思っていたのでしょう。それで、再びマケドニア経由で、エルサレムに行くことにしました。

⁷私は今、旅のついでにあなたがたに会うようなことはしたくありません。主がお許しになるなら、あなたがたのところにしばらく滞在したいと願っています。

「旅のついでに会うようなことはしたくない」というところに、パウロが彼らを自分の子のようにして

愛している、世話をしたい、養いたいという思いが表れていますね。コリントはいわば、他の諸教会より世話の焼ける子なんですね。だからこそ、彼は彼らに対して多くの時間を割いています。手紙も、他の手紙よりも長いものが、二つも新約聖書に入ったのです。

そして、パウロは、このようにしてコリントに行く予定、それからエルサレムに行く予定を、しっかり立てていました。旅程の計画を立てました。けれども、「主がお許しになるなら」とパウロは言っています。彼は、計画は立てても、主の導きによってそれを変更してもよいと柔軟な姿勢を持っていました。覚えていますね、彼はアジアで宣教旅行を行なおうとしても、御霊がそれを禁じられました。一度ならず、二度です。そして、マケドニア人が助けを呼ぶ夢を見て、主が自分をそこに遣わすことを確信したのです。主のみこころによって、計画を変更しました。

私たちは、最後は主が計画を立てられておられることを知るべきですね。箴言にはこうあります。「16:1 人は心に計画を持つ。しかし、舌への答えは【主】から来る。」「19:21 人の心には多くの思いがある。しかし、【主】の計画こそが実現する。」そしてヤコブは、一日の計画でさえ、主のみこころであれば、というべきだと教えています。「4:13-15 「今日か明日、これこれの町に行き、そこに一年いて、商売をしてもうけよう」と言っている者たち、よく聞きなさい。14 あなたがたには、明日のことは分かりません。あなたがたのいのちとは、どのようなものでしょうか。あなたがたは、しばらくの間現れて、それで消えてしまう霧です。15 あなたがたはむしろ、「主のみこころであれば、私たちは生きて、このこと、あるいは、あのことをしよう」と言うべきです。」自分の計画を、「みこころであれば」ということで、主にゆだねていく柔軟さを持ちたいですね。

⁸しかし、五旬節まではエペソに滞在します。⁹ 実り多い働きをもたらす門が私のために広く開かれています、反対者も大勢いるからです。

五旬節は、6月の初旬辺りにあります。それまではエペソに滞在すると決めています。その理由が、福音宣教のための門が大きく開かれているからです。使徒の働きで、著しい不思議や奇跡がパウロの手によって行われていたことを思い出してください。魔術を行っていた人々も、その書物を焼き捨てました。実り多い働きをもたらす門が広く開かれているのです。

けれども、いや、だからこそ、「反対者も大勢いるからです」と言っています。その大きな出来事が、エペソの劇場における騒動です。アルテミスの銀細工人たちが、多くの人たちがキリストへの信仰をもち、彼らの銀細工を買わなくなったので、騒動を起こしたのです。このようにして、福音宣教には、反対が付き物であることを知るべきでしょう。反対があるということは、私たちが前進していることの証拠とも言えます。神の国がサタンの領域に押し入っているからです。福音のために動いて行った時、反対があったからといって、気落ちしないでください。ましてや、これはみこころではないのでは？と早合点しないでください。モーセも、初めファラオに行った時は、民を出すのをファ

ラオが拒んだだけでなく、民にもっと厳しい労役を課しました。モーセは気落ちしましたが、主は、それさえもわたしの計画の内にあることを示され、彼は、ファラオが心を頑なにしても、主の命じられることに集中していったのです。

3B テモテの派遣 10-12

¹⁰ テモテがそちらに行ったら、あなたがたのところで心配なく過ごせるようにしてあげてください。彼も私と同じように、主のみわざに励んでいるのです。¹¹ だれも彼を軽んじてはいけません。彼を平安のうちに送り出して、私のところに来させてください。私は、彼が兄弟たちと一緒に戻るのを待っています。

パウロは、自分自身がすぐにはいけなくとも、自分の心と一つになっているテモテを先にコリントに送ろうとしています。コリントの人たちには、パウロの使徒としての権威を軽んじるような人々がいました。偽教師たちの存在もありますし、同労者でパウロの後に来たアポロのように雄弁ではなかったからです。けれども、それは彼らの霊的未熟さ、幼さから来ています。そのように、権威を侮る彼らは、逆にいうと本当の権威に怯えているかもしれません。コリント人への第二の手紙を見ますと、そうした彼らの心の様子を伺わせるような表現が出てきます。彼らは、福音が諸地域で信じられているという広がりを見ることなく、ひきこもりのように、自分たちの心を窮屈にしていると言ってもいいでしょう。

そのような中で、テモテを送ります。この第一の手紙を彼に託しているのだと思います。コリントの人たちは、身構えるでしょう。テモテは、パウロにとって信仰の息子であり、彼ほどパウロと意思を一つにしている人はいないからです(ピリピ 2:20)。しかし、テモテは若く、また臆病な性格でした。パウロは、テモテへの手第一の手紙で、「あなたは、年が若いからといって、だれにも軽く見られないようにしなさい。」と励ましています(4:12)。それで、コリントの人たちに、心配なく過ごせるようにしてあげてください、軽んじてはいけません、平安の内に送り出してください、とお願いしています。

それから、パウロは、なぜテモテに尊敬を払わないといけないのか、その理由を「主のみわざに励んでいるのです」と言っています。働きに応じて、尊敬がともないます。主のわざに励んでいるからこそ、その人を重んじないといけません。コリントの人たちは、語っている人が雄弁であれば、その人を重んじていました。しかし、本当に、人目につかないところで忠実に主に仕えている人こそが、重んじられるべきです。キリストのからだを教えている 12 章で、「からだの中で見栄えがほかより劣っていると思う部分を、見栄えをよくするものでおおいませう。(23 節)」と言っています。

¹² 兄弟アポロのことですが、兄弟たちと一緒にあなたがたのところに行くように、私は強く勧めました。けれども、彼は今のところ行く意志は全くありません。しかし、良い機会があれば行くでしょう。

アポロは今、パウロと共にエペソにいます。アポロとパウロは、元々、それぞれ異なる働きをしていました。エペソについては、アポロが福音を初めに宣べ伝え、その後にパウロが来て、教会を建て上げました。コリントにおいてはその反対で、パウロが教会を建て上げて、その後アポロが行って、育てていきました。パウロが植えて、アポロが水を注いだとパウロは手紙で書いていました。アポロは、非常に多くの聖書知識を持ち、雄弁に語る事が出来ました。これが、コリントの人たちを魅了させ、「私はアポロにつく」といって、パウロを見下げる人たちもいたのです。けれども、ここにあるように、パウロとアポロの当人たちは、主の同労者として、全く一つ心になっていたのです。

ここで興味深いのは、パウロがアポロに強く勧めたのに、アポロが全然その気になっていないのに、パウロはその意志を尊重していることです。パウロは、コリントにいる教会の人たちには、使徒としての権威をもって、とても強い姿勢で臨んでいますが、アポロと自分は対等の立場でした。また、パウロがエルサレムにある教会にて、彼が取った行為を思い出してください。彼は、ヤコブが聖霊によって決断した、異邦人に対する規定に同意し、同意しただけではなく、その規定を異邦人の諸教会に伝え、守らせようとしていました。そしてパウロは、アンティオキアの教会から遣わされ、またそこに戻り、宣教について報告をしました。このように、パウロは、自分は大きなキリストのからだの中に属しており、その権威の下で動いている、という認識を持っていたのです。自分がキリストから啓示が与えられたからとして、人々に対して権威を振りかざしているのではなく、キリストのからだの中の一部として、権威の下に自分を置いていたのです。

4B 強さと愛 13-14

このようにして、パウロがコリントに行く計画を知らせたので、短く、彼らに対して勧めをします。

¹³ 目を覚ましていなさい。堅く信仰に立ちなさい。雄々しく、強くありなさい。¹⁴ 一切のことを、愛をもって行いなさい。

まず、「目を覚ましていなさい。」です。コリントにある教会には、死者の復活はないという偽りの教えが入っていました。また、他にもさまざまな肉の行ないが教会の中にありました。そうしたことをそそのかす、偽教師たちがいます。だから、「目を覚ましていなさい。」です。

次に、「堅く信仰に立ちなさい」です。15章の冒頭にあった、福音のことばに堅く立っているということです。私たちがキリストの上にしっかりと立っていないと、コリントの教会のように、偽りの教えや肉の行ないに流されてしまいます。しっかりと立たなければいけません。

そして、パウロは、「雄々しく、強くありなさい。」と言っています。以前は、雄々しくが、「男らしく」と訳されていました。コリントにいる人々は、言葉においては強がっていましたが、実質がありませんでした。キリストにある幼子でした。パウロによる戒めに縮み上がっていました。ですから、

「雄々しく、強くありなさい。」であります。

そして、「一切のことを、愛をもって行いなさい。」とありますが、しっかりと福音に立ち、教会の中にある悪を取りのぞく必要もあります。その時に一切のことを、愛を持って行います。私たちが今朝、歌った中に、「強く優しいイエス」様というのがありましたね。主は、優しい方ですが、力に裏打ちされた柔和さです。

5B コリント出身の働き人 15-18

次に、今、コリントからエペソに来ている働き人を、指導者として敬いなさいという勧めをします。

¹⁵ 兄弟たちよ、あなたがたに勧めます。ご存じのとおり、ステファナの一家はアカイアの初穂であり、聖徒たちのために熱心に奉仕してくれました。¹⁶ あなたがたも、このような人たちに、また、ともに働き、労苦しているすべての人たちに従いなさい。

ステファナの一家については、パウロが、1章の初めに、数少ない自分がバプテスマを受けた人たちとして名を挙げていました。彼らは、今回のコリントにある問題をパウロに伝えに来た人々の一部です。パウロは、彼らの指導に従いなさいと勧めていますが、それは、「聖徒たちのために熱心に奉仕してくれました」ということです。テモテのことを軽んじていけないと言ったのと同じ理由で、その忠実な、熱心な働きゆえに従いなさいということなのです。

しばしば、意見はあって、それは正しく聞こえるのだけれども、実はその働きに従事していない、労していないので、空回りしている、勘違いしていることが多いです。出てくる言葉が、主に従って労しているというところから出てくるべきであり、だから、労している人々の言っていることに聞き従うことは大事です。

¹⁷ ステファナとポルトナトとアカイコが来たので、私は喜んでいますが。あなたがたがいない分を、彼らが埋めてくれたからです。¹⁸ 彼らは、私の心とあなたがたの心を安らがせてくれました。このような人たちを尊びなさい。

ステファナやその仲間を尊ばなければいけないもう一つの理由は、コリントとパウロの間の架け橋になっているからです。「私の心とあなたがたの心を安らがせてくれました」と言っています。コリントの教会について、問題を報告しただけでなく、おそらくは彼らは自分の仲間のことを愛していて、それでパウロにも、執り成すようなことを語っていたのだと思います。パウロも、彼らのおかげで、コリントの教会は、やり直しができる、健全になることができると期待できたのでしょう。

平和を造る者は幸いであると、イエス様は言われましたが、そういった人々もまた、人目につか

ず、むしろ、極端な人々の間で板挟みになり、踏みつけられやすいです。そういった人々を見下げ
てはならず、尊ぶ必要があります。

2A 挨拶 19-24

そしてパウロは、挨拶をします。彼はまず、自分を差し置いて、アジアの諸教会の人びとの挨拶
を紹介します。

1B アジアの諸教会 19-20

¹⁹ アジアの諸教会がよろしくと言っています。アキラとプリスカ、また彼らの家にある教会が、主に
あって心から、あなたがたによろしくと言っています。

コリントの人たちは、エーゲ海を挟むアジアのことは、ほとんど関心がなかったのではないかと
思います。しかし、アジアの教会とも彼らはつながっているのです。だから、この挨拶はとても大事
です。アジアの人々は、彼らに関心があります。

そして、「アキラとプリスカ」です。この夫婦の存在はとてもユニークで、貴重ですね。元々、ロー
マの人びとでした。ユダヤ人追放令が、皇帝によるローマで発令されて、彼らはコリントに逃げて
いました。そこで、パウロと出会います。パウロも、アキラとプリスカも、天幕作りという手に職を持
っています。それで共に働きながら生計を立て、コリントの教会の建て上げをします。

その後、パウロと二人は、エペソに行きました。パウロはわずかにそこに滞在しただけで、エ
ルサレムに上り、それからアンティオキアに行きました。アキラとプリスカはそのまま留まっていた
のです。その時にアポロが来ていて、彼はバプテスマのヨハネの道までしか知らなかったのです
が、二人がもっと正確にこの道に付いて教え、それでアポロは力強くイエスがキリストであることを
証しました。そして、パウロが、アンティオキアから、はるばるエペソにまでやって来て、それで、
驚くべきわざが起こります。

そしてパウロは、マケドニアからコリントに行き、三か月の間、滞在しました。その間に、ローマ
人への手紙を書いています。その挨拶の言葉に、プリスカとアキラによろしくという言葉があります
(16:3)。彼らは、エペソからすでにローマに戻っていました。二人は、動いて行ったところで、自分
たちの家を開放し、家の教会を運営していたことがわかります。「彼らの家にある教会が」とありま
すね。そして、「主にあって心から」と言っていますね。プリスカとアキラにとっては、コリントでパウ
ロと教会開拓を共に労しました。思いがとても詰まっていることでしょう。その教会の人たちも、ま
だコリントの教会に行ったことがない人たちが多かったと思いますが、それでも思いを募らせて、
心から主にあって、よろしくと挨拶しているのです。これが、諸教会にひろがる御体の姿です。

²⁰ すべての兄弟たちが、あなたがたによろしくと言っています。聖なる口づけをもって互いにあいさつを交わしなさい。

アジアの諸教会のすべての兄弟からの挨拶です。そして、コリントの人たちには、「聖なる口づけ」による挨拶を勧めています。当時だけでなく、今も、地中海周辺の地域の人々は、おじぎではなく、握手だけでなく、それ以上に口づけによる挨拶の習慣があります。恋愛の時の口づけではなく、同性の間でも行い、頬に口づけをするような親愛の情を込めた挨拶です。

2B パウロ自身の手記 21-24

²¹ 私パウロが、自分の手であいさつを記します。

ここまでが、口述筆記でした。パウロは、他の手紙も口述筆記にしている形跡があります。ローマ人への手紙も、「この手紙を筆記した私テルティオも、主にあつてあなたがたにごあいさつ申し上げます。」とあります(16:22)。それで、これが確かにパウロの手紙であることを、自分の筆記によって署名のようにして書き記しています。ガラテヤ人への手紙には、「ご覧なさい。こんなに大きな字で、わたしはあなたがたに自分の手で書いています。」とあります(6:11)。それは、彼が目が見えないうちで、考えられるからです(ガラテヤ 4:15)。それで、彼が最後に自分の手で書きたかったことが次です。

²² 主を愛さない者はみな、のろわれよ。主よ、来てください。

午前礼拝で、お話ししました。この、「主を愛さない者はみな、のろわれよ。」という言葉には、偽教師たちの存在をかなり意識しているでしょう。彼らが福音から引き離し、自分のところに引き寄せようとしている者たちが、呪われよ、と言っているのが伺えます。ガラテヤの教会においても、別の福音を宣べ伝えている者たちは、呪われるべきだと宣言しています。「1:8 しかし、私たちがあれ天の御使いであれ、もし私たちがあなたがたに宣べ伝えた福音に反することを、福音として宣べ伝えるなら、そのような者はのろわれるべきです。」彼らの仕業で、主にある平安、喜び、愛がすべて奪い取られてしまいます。罪の中に戻すようなことを行っているのですから、そのつまずきのゆえに、呪われてしかるべきです。呪いとは、神の祝福がない状態。神から離れているので、その祝福から自らを引き離している状態です。

そして、「主よ、来てください。」と言っています。主が来られる時、諸教会が一つになって引き上げられ、花嫁なる教会が花婿なるキリストに引き取られるのです。この時を待ち焦がれています。同時に、このような関係を邪魔するような者たちには、あなたの裁きがあるように、という、主への愛から来る熱情が込められているでしょう。ダビデも、詩篇の中で、主を憎む者たちに対する呪いを歌っているものがあります。それは、彼らを呪うのではなく、主ご自身に怒りをお任せする姿です。

私たちも、主が来られることを思い巡らしながら、自分の怒りを神に任せることが必要です。

また、午前礼拝でお話ししましたように、今、終わりの日にいる私たちには、信仰によって生きていく中で、がっかりすることがあります。恐れること、混乱することがあります。しかし、それでも忍耐して主を待ち望むときに、主よ来てくださいという、掛け声は私たちの霊を喜ばせます。ヘブル書に、集まることを怠ったりせず、互いに励まし合いなさいとありますね。主が来られる日を思って、励まし合いなさいと言っているのです。「10:25 ある人たちの習慣に倣って自分たちの集まりをやめたりせず、むしろ励まし合いましょう。その日が近づいていることが分かっているのですから、ますます励もうではありませんか。」

²³ 主イエスの恵みが、あなたがたとともにありますように。²⁴ 私の愛が、キリスト・イエスにあって、あなたがたすべてとともにありますように。

偽教師のような者たちに対する呪いを宣言した後に、戻って来られる主に裁きを任せた後に、主イエスの恵みがあるように、と祈っています。主の恵みの中に彼らが留まっていてくれるように、と祈っています。それから、パウロが彼らを愛していることが、本当に伝わってほしいと願っていますね。キリスト・イエスにあってともにあるように、と祈っています。コリント第二では、その愛が、彼らが心を自分たちで狭くしてしまっているために、伝わっていない状況が書かれています。彼らがまだキリストにある幼子であるために、パウロの愛のこもった指導が伝わらず、勝手に誤解している様子がうかがえます。そのための祈りです。

以上、コリント人への手紙第一を読み終わりました。私たちは、その後のパウロの彼らに対する働きかけを見ていきます。そこでは、もっとパウロの、福音の働きについての姿勢が書かれています。ここまで、自分の心が明かせるとはすごいと思いますが、そこから、彼の思いと心に働く、キリストの思いを見ていくことができます。